

『自分で考え、判断し、行動できる生徒の育成』をめざして～

2025/10/21

SAH×地域 “つながり” ある社会を

地域の活性化に向けて、学校という枠を飛び越えて活動している前南生もいる。今回は「ココロつながる伊勢崎プロジェクト」で、「ココミル交流板」という企画を立ち上げ運営をおこなった山崎漣吾さん(3年)に話を聞いた。(編集 教頭)

繋がりが薄れてしまっているという危機感から

Q この活動をやろうと思ったきっかけを教えてください。

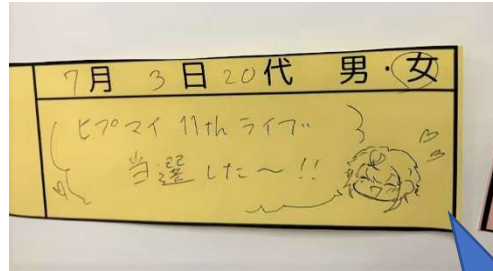
「近年のSNSの発達や、危機管理の徹底により、人々のつながりが薄れてきているように感じています。それを悪いこととは言えませんが、それは少々寂しく思うので、離れてしまった人々のところを、再び繋げようと思い、この活動に踏み出しました。」

Q 「ココミル交流板」の内容を教えてください。

「掲示板に思いを書くと、それに対して他の人がレスポンスというか回答をくれるというもので繋がりを感ぜられるようにするということをねらいました。6月29日から7月26日まで、伊勢崎駅改札口前にて行いました。駅に掲示板としてホワイトボードを置き、ホワイトボードに書かれたお題に沿ったものを指定の紙に回答し、それを回収ボックスに入れます。翌日にそのホワイトボードに、回収した紙を私が貼り付けるという形です。」【右写真；伊勢崎駅に設置した「ココミル交流板」】

Q SNSと違って、「リアルな空間でやった方がいい」と思った理由を教えてください。

「SNSでは反応する人がどこにいるのか全くわかりません。しかし、伊勢崎駅に設置された交流板にある書き込みや反応は、伊勢崎駅を利用している人だけが書けるので、身近に住む人が書いたものという認識が生まれます。そうすると、変なことも書きにくくなり、反応が返ってきた時、SNSよりも嬉しいと感じられます。」



▲「最近うれしかったこと」の回答

◀貼り付け作業中。立ち止まり
関心を寄せてくれる人々



▲ホワイトボードに貼りきれないほどの回答が

やってみると色々なことが見えてくる

Q この活動を通して、学んだこと、課題として残ったこと、これからどうしていきたいか等を聞かせてください。

「学んだことは、どれだけ周到に用意しても、いざ始めてみると、『もっとこうすれば良かった』という改善点は出てくるということです。1ヶ月という長さもあり、開始直後と終盤を比べると、いらないものが削られたり、必要なものが不足していたりとかかなりの変化がありました。具体的には、『反応する人々が書く付箋が不足してしまったこと』、『隣に置いていたグラフが機能していなかったこと』、『4周目のお題を“伊勢崎の良いところと悪いところ”だけでなく、“どうして欲しい”という点も含めて記入してもらえれば、市への報告時に具体的な案が提出できたこと』等です。

課題としては、もう少し人を頼ればよかったと思います。1ヶ月毎日駅に行って回収するのはやはり大変だったので、人を頼ればもう少し丁寧に、かつ効率よく立ち回れたと思います。

展望は、これをユーススペースで引き継いでもらい、私は専門的に人間の心理を学び、知識をつけた上で、このような人と人をつ繋げるために動く人(引き継ぎ含め)の手助けをしていきたいです。」

☆校長より☆ 今回の活動はエージェンシーを発揮した優れた探究活動だと考えます。探究活動で言う課題とは「理想の未来」と「成り行きの未来」とのGAPを考えるものですが、ここでは『離れてしまった人々のところを、再び繋げるにはどのような手段があるか』を課題として設定しています。そこで、考え出した解決方法が「ココミル交流板」の設置です。今回は、これを実装によって試行し、その問題点を探っています。現在、総探の時間に限らず、このような社会と直接関わる探究活動に取り組む高校生が増えてきていると感じています。皆さんも、課題設定の意識をもって自分の地域を見てみましょう。(校長 原 拓史)